

二朗の交通事故

二朗が二才の時交通事故に遭った。妻は喫茶店を経営していて忙しく働いていた時であった。

私の電気店は忙しくなかった、余り普及していない家電製品の販売と修理、電気工事は始め

たばかりで、たいしたことはなかった。

妻は私が出掛けていると、電気店も見えてくれる。また家には妻の妹よき子が同居していて経理学校に通学していたが、合間には妻の店の方も手伝っていた。

ある日妻から子供達を見て下さいと頼まれたのに、特に予定がなかったので、無視して一人コッソリ仙台駅前映画を見に出掛けた。駅前の映画館に入り、暫くぶりの映画鑑賞だ。あの当時駅前には五・六軒の映画館があった。長町駅前にもあった。榴ヶ岡公園の近くにもあり、電波高校時代はよく見にいった。

途中から観るのだから、一回半見るようになる。二本立てだと随分時間がかかる。当時は私鉄で列車本数のないの仙石線に乗り出掛け、三時頃自宅に帰った。

店の前に来ると、開店しているはずの、電気店も喫茶店も閉まっている。家の中に入ると義妹の、よき子がシクシク泣いている。訳



看護婦さんと

を聞くと、二朗が店の前で自動車にはねられ、国立病院に運ばれ、重体とのこと。心臓の高鳴りを押さえ、病院に駆け付けた。病室で妻は二朗を見守って居た、涙ながらに意識不明の重体だと言う。

仕事に精を出して、二朗が家の中に居たとばかり思ってたから、何時の間にか道路に出て、二十人町のパン屋さんの車に跳ね飛ばされ、育英学校の板塀に頭を打ち、頭蓋骨を骨折したそう。

私は「後悔先に立たず」と言うけれど、妻の云う事を素直に聞いて子供達を見ていたら、二朗にこんな目に遭わせずに済んだものにと、慚愧の思いだった。妻は私の顔を見て、察したのか、なにも言わなかった。次の日の河北新報朝刊に、二朗ちゃん意識不明で重体の交通事故記事が載った。

二朗が危期を脱したのは三日後だった。私と妻は二朗が頭を打っているの、「知的障害者になるのではないか」と心配だった。まだ二才の子供である。義妹のよき子が、入院してから全快して退院するまで病室に寝泊まりして、看病してくれた。

障害者にもならず、元通りの元気な体になったのは、奇跡的だったと思う。跳ね飛ばされる瞬間を目の当たりにした人は、二朗は鞠のように飛ばされ、育英高校の道路に面した塀に、頭から打ち当たったそう。その当時の育英の塀は、幅十センチ長さ一メートル位の薄い板を、透かして小割に打ち付けただけの簡単なものだから一命を取り止めたのだろう。当時は道路も車がすれ違えない程の狭い道だ。

約一ヶ月で全快し退院出来た。

昭和三十三年の時だから、四十五年前の出来事、私としては痛恨の極み、一生のうちいろいろあると云っても、人命に関わる出来事には、逢いたく無いと思う。

二朗は普通の人以上に育ってくれて、大学を卒業、今は社会人の一員として頑張っている。